廿一年四月（版權所有）廿八日發兌

THE WOMAN'S MAGAZINE.

女學雜誌

東京女學雜誌社

一冊五錢 府内無税 郵税一錢 毎土曜出版

第百七號

社説
理想之佳人（第四）
似而非美人
論説
家内經濟の大要（木村熊二）○婦人纏風の手段（田村直臣）
叢話
子供私己の衞生（大澤謙二）○プライニー及木村長門守の妻の手紙○古今婦女の比較（鈴木弘恭）○
小説
都鳥
佳・傳
ナポレオンの母
寄書
歌（佐々木信綱）
小供の話
忠實の家來
宮廷錄事
皇后宮行啓○徂息所の臨院
新報
婦人勸業會社○雜誌の世の中○修身職業
英和女學校其外

許和堂中川昇刻　番二〇三一一一五

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

No. 107, April 28th, 1888.

EDITORIAL:— The Ideal Belle: No. IV. Of Pseudo-Belles.

LEADING ARTICLES.— Principles of Houshold Economy, by Rev. K. Kimura; Means of Social Reforms, by Rev. N. Tamura.

MISCELLANIES:— Children's Health, by Prof. K. Osawa; Letters sent by Pliny and the Wife of Kimura Nagato no Kami to their respective Wife and Husband; of Japanese Women Ancient and Modern, by Mr. H. Suzuki; Mistress and the Maid.

NOVELS:— "Miyakodori."

BIOGRAPHIES:— Napoleon's Mother.

CHILDREN'S COLUMN:— A Faithful Servant.

CORRESPONDENCES.

GENERAL NEWS.

前號（第百六號）目次

●社説 理想之佳人（第三）宜からぬ女原

●論説 小兒の精神及其保護法（榊俶）○日本婦女の地位（伴直之助）

●批評 涙の谷○玉霰窓の小篠

●叢話 米國婦人禁酒會々頭の來書○細君と下婢○古今女風の比較（鈴木弘恭）○わがつま

●佳傳 ワルウイック女の金言

●寄書 佐々木家壽子の傳○詩二首（川上柳外）○文苑（鈴木弘恭）

●小供の話 忠實なる家來

●新報 東京婦人矯風會雜誌と反省會雜誌○大日本風俗改良會誌其外十件

●海外女報 黒奴の娘の醫博士外一件

●珊瑚之珠（第六十三回）

東洋の美人

濃纖得中非短長。紅素天生誰飾粧（王琚）

似見霜姿白如看月彩鮮（丁澤）

連娟眉繞山。依約腰如杵。

手如柔荑膚如凝脂領如蝤蠐齒如瓠犀螓首蛾眉巧笑倩兮美目盼兮（國風碩人章）

錦江水濇骨生女白如脂其間杜秋娘不勞朱粉施（杜牧）

玄宗與楊妃共賞太液池千葉蓮指妃謂左右曰何如此解語花

比玉香猶勝。如花語更眞

雲想衣裳花想容

裊娜腰肢淡薄粧。六朝宮樣窄衣裳。著辭暫見櫻桃破。飛盞遙聞荳蔻香。春惱襟懷身覺瘦酒添顏色粉生光。此時不敢分明道。風月應知暗斷腸。（韓偓）

時に障子をさとおしあけて立出る處女あり、年は未た三五に過ると覺しく萬づ臆し勝にて衣の着なしは量めけど天性の美形玉の如く顔は桃李の花を賺き膚は雪を束しに似たり（種彥）

當時何でも四百餘州第一番の美女沈魚落雁閉月羞花と賞るのは呉の國に大喬小喬と云ふ姉妹の娘だと噂を仕やす（春水）

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌第百七號
明治二十一年四月廿八日發兌

社説

○理想之佳人

（第四）○似而非美人、

彼の藝娼妓、浮れたる女原、及び堂々たる女權論者は、固より是れ最上の佳人にあらざるや明白なり。故に、小說家、假令艶筆を揮つて巧みに此等の人物を畫き畢せたりとも、大凡そ少しにても高尙の愛情を心得たらんものは、何人も終には、此等の佳人の眞正に佳ならざることを悟るに至るべし。左れば此の如き小說家が理想したる中以下の佳人は、必ずや向後中以上の人々の爲に好まるゝ者とあらん樣なし。即ち凡そ上流の士君子は、此後ち、何人も藝娼妓を以て、浮れ女を以て、殺風景なる女丈夫を以て、其の意中最上の人物とは爲さゞるが故に、上流の令孃令夫人も亦た、夢にだも此の樣なる宜しからぬ佳人たらんとは望まれざるべし。但だ悲しむ今の實際世界に於ては、現に尙ほ往々如此き魔物片環物が美人界に往來するとありとは申せ、吾人若し向來の理想境に對して、之を理想的に想像するときは、必ずや遂に、如此き佳人を以て極美の婦女子なりと、認むるものなきに至るべしとは理想せらる。

熱もあらず冷くもあらぬは、物の尤も厄介なるものなり。黑もあらず白くもあらぬは、朱き色の尤とも奪はれ易すき所あり。左れば吾人は、彼の明白に宜しからずと見ゆる佳人の、小說界に理想せらるゝを恨むよりも、一見して殆んど人目を眩するに足るの佳人、即ち羊の皮を衣、麗姫の面を冠ぶると雖ども、若し之を放てば狼とあり狐と爲らんものゝ如きが珍重せらるゝをば、甚だ殘念に思ふもの也。故に見るべし、窈窕たる佳人、才子を慰さめ、慧敏ある才子、佳人を勞はり、彼れ明治世界の政治家と爲れば、此は文明主義の賢妻となり、所謂る内助の功あつくして、雍々たる和樂、室家の内に在るが如く」書流したらんものを見れば、眞に是れ極美の伉儷極美の佳人ありと思はる。此を以て、未來の才子は之を讀んで此の如き佳人を得んことを欲し、未來の佳人は如此き風にして、其才子を慰さめんと欲す。於此乎、數萬の讀者は、知らず識らず此の理想人物の交際に心醉して、則ち陰然、佳人と云へるものゝ理想は、世上一般に斯の樣にして定まるに至らん」然るに、吾人密かに、今時流行の小說界に行はるゝ、

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

彼の才子佳人の交際なるものを見るに、又是れ、昔日の男尊女卑に一枚の被衣を覆はせ、たゞ時勢に應じて一段の早塗を爲したるものに過ぎずとは思はる。吾人常に論ず、昔しは女の學問せぬが女子の嗜しなみと爲り、今まは女の學問したるが當世婦人の心得と爲る、故に若し當今娶取の需要に應じて現世一と通りの學藝を習はふ者とすれば、即ち是れ、亦た一種のお化粧學問にして、田舎娘が祭禮に白粉を塗り、踊つ兒が馬鹿噺に衣裳を飜がへすと同日の論なり。只其相違する所は、一は其事の稍々高尚めきたると、一は其甚だ卑近に聞ゆるとの違ひあるのみと論じたり。思ふに、今の所云る才子佳人なるもの亦之に均し」當世の論者や、ともすれば云ふ、女子は、男子を慰さめ、男子を助け、男子の疲れたるを醫し、男子に幸福を與ふるものなりと。眞に然り。女子は男子に對して斯の如き善良の感化を施し得るの徳あるものなり、然れども、女子が斯の如く信切に男子を待すると共に、男子は抑も果して何ようの心得を以て之を受けらるゝ乎、彼等は斯々の如く爲すべきものなりと定めて、則ち斯々の如く之に待せらるゝにあらざるなきか。云く妻は夫を慰さむべきものなりと、而して之に慰さめられて之を良妻と云ひ、云く婦人は男子に幸福を與ふるものありと、而して之に幸にせられて之を良婦人と云ふ。是れ眞に可なり。然れども、女子既に良妻たり良婦人たりて、而して當の男子は果して如何樣の男子たりや、甘んじて彼等の慰めを受るを知て、亦た之を慰さむべきの義務あるを知らず、甘んじて彼等に幸にせらるゝを知りて、亦た之を幸にするの義務あるを知らず、一言するに、只だ女子に介抱せられ、慰藉せられ、懇待せらるゝの必要を論じて、而して己れ亦た之を懇待し、慰藉し、介抱するの必要を辨せず。豈に是れ矢張り、女子を以て男子の爲に盡力すべきものと心得たる、昔日の男尊女卑論と同樣の議論にあらずや、」男子が、終日外界に出で、惡魔外道と取引し日暮大に疲勞して家に歸るとき、固より是れ大ひなる慰めを要するの時あり。然れども、終日窮屈なる火打箱狀の家内に籠城し、子に泣かれ、下婢に反かれ、最と面倒なる些細の經濟を遣り繰り、何の面白味もなくして、只だ鬱々として暮らしたる者の夕べは、亦た是れ大ひなる慰めを要するの時にあらずや。失望落膽したる男子の心、失敗困厄に陷いりたる男子の膽は、實に憫れむべきものなり、堂々たる大事業の蜃氣樓は、只だ天の一方に懸て、徒らに彼が心を苦しませ、古英雄古豪傑の偉跡は

、明白に歴史上に立ち現はれて、空しく彼が功名の心を痛しむ、而して、失敗し、落膽し、失望し、困厄したるときハ、固より是れ、大に之を幸ひにするもののあらんを要す。然れども、一年三百六十日、其の事業は沈々として人に聞へず、時に、神ならでは知らぬ胸中萬斛の歎きに、迫まられ、時に、雙眼の睫毛にだも尚ほ之を現ハさゞる、温膓無限の涙にむせび、軟らかなる手にて撫育したる愛兒は、放蕩し、頼みの綱の實家は、兄の不處存にて、落魄し、花咲けりといへど、出づるの餘暇なく、夏涼しといへど、避暑を其地に卜するあたハず、秋月のさゆる夕べば、徒らに浮雲を歎じ、雪天たゞ郎と一家族との爲に新衣服を裁するの憂ある、凡そ如此き、報ひなき、知られざる、最と憫れなる働き手は、亦た當に其糧を得て、以て大に幸ひにせらるべき者にあらずや」、然れば男子が慰めを要する如く、女子も亦た慰めらるゝを要し、男子が幸ひにせらるゝ如く、女子も亦た、幸ひにせらるゝを要す。

故に吾人は、滔々たる今の所云る女權論者、即ち能く新文明の佳人を理想して、眞に能く立派なる細君の雛形を心得たりと思へる、人々に告ぐ、諸君希はくは、彼の能く才子を助くるの佳人を畫がくと共に、此の佳人をして、只だ是れ才子を介抱するが爲に存するものと爲らしむる勿れ、佳人が才子の爲に必要なるは、猶ほ才子が佳人の爲に必要なるに均し、二者の間に毫末も、先後主從の差なしと覺悟するは、即ち、眞正の男女同等、眞正の伉儷和樂に、大切なるの覺悟なり。之を以て、大凡そ、最上の佳人を理想するに當たりて、先づ敬の一字を忘却す可らざる事、是れ今の女權論者、今の小説家今の所謂る才子佳人論者に向つての、第一に肝要なる忠告たり。

吾人は如此く大胆に、今の小説家に向つて愚考する所を述べ、たゞ無遠慮に、其の小説書中に現ハるゝ所の佳人に欠くる所ろあるを辨じぬ。故に、吾人は最後に至つて、謹しんで、平生寤寐に轉々として反側し、日夜に之を思ひ之を懷ふ所の理想佳人を、叙すべし、曰く、吾人が最も愛慕する所の佳人なるものは、先づ吾人をして之を愛すると同に、亦た之を敬せしむるを得るの資格あらざる可らず。然れども、必ずしも沈魚落鴈閉月羞花の好顔あるとを要せず。但だ其頭腦の甚ハだ確かなると共に、其の心情の甚ハだ優美なるもの、其の識見の甚だ遠大なると共に、其の用意の甚だ綿密なるものありて、而して其品德は清潔潔白、其風采は優雅温和ならんとを

望む。左れば、假令ひ舞踏は上手にあらざるとも、音樂も亦た左程に堪能ならざるとも、先づ上帝を信じ、眞理を喜び、愛情に富み、自尊の精神に厚く、而して楚々人を動かすの優美なる態度を以て、內に有爲快活なる、忍强不撓の勇氣を含み居らんことを希がふもの也。

論說

○家內經濟の大要

木村熊二

男子ハ外にありて社會の時務に奔走し女子ハ內にありて家中經濟を負擔するとハ泰西舶來の新說にあらずして本邦その昔より傳り來れる敎にて上ハ縉紳家の夫人より下は卑しき業に暇なき賤の女さへもこれを婦人の職務と覺へたりむかし板倉勝重か駿府の奉行に擢でられし日固く辭み家に歸りて妻と計らんとて退營せり妻ハ良人の歸を待わびて夫婿にハ今日こそ慶事ありと人傳に聞侍りそは何事ぞやと問ひけるに勝重のたもふやう我儕ハけふ奉行の命を受けたれど汝と之を計らんとて先つ辭み奉りたりそを何と思ひ給ふやといふに妻ハ驚きてこはそも公事なれば妾ハ如何でか可否すべきやと勝重かさねてのたまふ樣今より後我儕が外にありて爲す事に喙を入たまはずば直に命を拜せんと妻と固く誓ひて後其の職に附たりと婦人ハ家事を整理し經濟を善し食物を撰み多品ならざるも調理善くして味を含み衣服ハ美麗ならざるも潔淨かにして身躰よ可なり所謂「人生の術を知り趣味を解する」とこそ肝要なれ男子の如くならんとて社會に出で女丈夫たらんとなどは知識ある勝重の屑とせざる所になん越後獅子に「我等が女房を娶じやないが飯も炊たり水仕事」などいふて妻たるものハ衣服飲食のとに注意して良人をして心に滿足を覺へしめたるとを見るに足るへし女ハ中饋の職を司どるといひて西洋料理の傳習を受け費用の多寡を問ず割烹を試み一皿のビーフステーキと一盆のフルーツケーキの爲めに老婢ハ竈間の烟に呻吟し侍婢ハ杯水を覆して點滴紅袖を汚す庖厨の混雜ほとんど名狀すべからざるに良人ハ食堂に端坐して髯を撚りながら美なり佳なりと賞翫して止さるを樂とするが如き夫人の行爲をいふにハあらざるなり。

余一日或る縉紳家に招かれ晩餐に伴ふの榮を辱ふせり其夫人ハ嘗て京濱の女學校を卒業せられし人にて殊よ外國仕立の女流なれバさすがに卓上の會話も英和まじりにてスープの吸方に手打蕎麥を食するの響きなく肉叉を仕用するに皿にて鷄卵

をかきまわす音なしシェキスピールとウェブリーハ餘程御得意と見へて馬琴京傳よりも遥に人情を穿ちて小說と演劇の躰にかなひたりなど申れたり又洋服の着用方といひ縁りの黑髪に一輪の山吹をかざしたる束ね髪ハ青より出たる藍の如く西洋婦人も中々に及ばぬ程の風姿あり斯るめで度夫人にして家事を整理するの術に至りてハ人をして一驚を喫せしめたり車夫ハ輪を叩いて馮驩の歎を催し侍婢ハ頤を襟に納めて他人の爲めに嫁時裳を作ることを悲みたり坐室ハ机を置きて美麗なる編物を掩ひ一瓶の櫻花われのみ春と開き亂る閑室ハ如何ならんか憐むべし蜘蛛紅衣に塵の落んことを恐れて六角の網を四隅に張りて終日之を護り居たり良人の書齋ハ三四箇の椅子に書冊冠帽を載せて衣服も亦其の上にあり圓き机も積み重なれる書類にて新に築きたる五稜郭にさも似たり舊き新聞雜誌ハ盡魚の攻撃に苦んで架上より半身を投げて應援を請ふが如し朝四暮三を喜びて手より口に入るゝばかりの生計ハ家內經濟の大要を五里の霧中におきて顧ることなし嗚呼明治開進の世に生長し殊に泰西風に敎育せられたる婦人にして螢雪十年の後ハ家を齊へ身を脩めて滿室の空氣をして駘蕩たる春の如く良人をして幸福なる家の感覺を生せしむる能ハざるはそも〳〵何ぞや泰西の敎育法果して我が邦の婦人に適せざるか將た今日女子敎育家の任を負ふ者其の人を得ざるによるか今我が邦婦人の急務として學ぶ所を看了せば其の弊害の因て起る所以を知るべきなり夫ハ英語を學び蹈舞音樂を知り專ら交際上の便を計んとするにあるなり試に西洋婦人の敎育を見よ幼稚よして日曜學校に入り淑雅善良なる師に從ひまだうら若き初學の心から縁り色增す頃迄も溫和なる基督敎の空氣の中に生長して再び他の學校に入り智德の花を開せつる後初て人の妻となり家事を整理して衣服飲食の末事より凡百の事迄も良人の指揮顧慮を煩さず兒女家庭の敎育も全く其手に成り奴婢も其美德に感化せられ其厚遇を感じて忘る暇なく自己が全力を主婦の爲めに盡んことを勉たり良人は外より來て我が家ハ世界中の樂土なりとて「愉快なる家幸福なる家」の歌を唱て歡樂す婦人敎育の結果ハ斯ありたけれさるを我邦の婦人ハ外部の見へのみ美しからんことを務て八重七重咲り短き山吹の黃金を徒に費して末ハ實のなき敎育に心をとゝめあたら月日を送るあり又近日敎育を掌る人ハ女子を文の林に誘導ひつゝ美き文辭の花を拾ひ集め優美なる律呂の音に耳を傾け古今の精妙を丹青の筆に寫さしめんことを務て基督敎によりて婦德を養成することなく

家内經濟簿記學を先つ第二塲の敎育と見做して顧みさるのみか割烹裁縫は末技にして婢妾の爲すべき業なれとて之を等閑に付するもあり嗚呼如何にして有爲の婦人を養成するとを得んや生涯美術を以て世を送らんと思ふ人はさもあれ人の妻となり母となり幸福の家を造成せんと欲するものは鯉の瀧昇りの畵を見て鮒が素麪を食ふと疑ふも寧ろ割烹裁縫に熟して家内經濟を能する人にこそ米國のパンデベルは有名なる黄金家なれと其の夫人は常にカリコの衣を着して朝暮庖厨に出て侍婢と共に割烹に從事すといへり九重の尊位にまします女王ビクトリヤは手自ら糸を紡き皇子の幼稚ましませし時は其の衣裝を縫ひ給ひし事もあり又編物なとは政を聽き給ふ暇には必す之を爲し給ふとかや故あるかな英國婦人社會の盛衰は女王の生死によりて分るとは米國にては縉紳家の夫人のショピンクとて毎朝十時頃必す市街へ出て一日の廚部に供給すべき物品を買ひ求め家に來りて下婢に一々其の割烹を命し自ら金錢の出納を帳簿に記するの習慣あり開明の國に住馴たる婦人の習慣をかんかみても我か邦婦人の敎育に欠く可からさるものは基督敎と家内經濟にありと信するなり夫は基督敎は幸福なる家を造成し家内經濟は衣服飮食の末事より家中凡白の事に便利を得せしむるもの也余今家内經濟の大要を說きて將來有爲の婦人に一讀を乞んと欲するなり。

○婦人矯風の手段

田村直臣　述

左は四月十八日東京北部婦人矯風會にて演說せられたるを松川福三郎氏が筆記せられたるものなり。

私は今日東京にある所の北部に屬する婦人矯風會の御方々より斯の婦人矯風會の事に就て何か話をして呉れいと云ふ御依賴でありましたが何分急の事でありましたから其仕度をする事が出來ませんで誠に皆なさんをして充分の御滿足を爲さしむる事が出來ませんと思ひますが自分の感する所を少し御話を致します。

此の前の月曜日に或る外國の宣敎師と水戸に行きました御承知の通り水戸は名高い處で町も多い所でありますが或る日外國の宣敎師と散歩しました時に西洋料理に這入りました其西洋料理の家は大變に立派でありましたが段々這入つて樣子を見ると大いに笑ふ可き者がありました西洋造りには違ひないが二階に掛けてある梯子段の急なる事は殆んど富士の山に登る樣に急で綱なでも無ければ登る事が出來ぬ樣でありました其外四方を見廻はせば色々な彫刻抔があつて隨分金の掛ッた

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

普請であるが窓抔も餘りに多く誠に奇態な事である其窓の造り方の順序を見又其牀の樣子を見まするに外國人の評には水戸の近處には木も澤山ありませうし其他石や何かの材料もあり隨分多くの物を使用する事が出來る然るに梯子段の登り方も外國の家と云ふ名が有ッても外國の造りでないと云ふ事に就て考へて見ますに幾許其處に麗はしい御影石や又種々な良き材木が有ッても大工が無いならば家を充分に建つる事が出來ません夫れで又上手な大工が有ッても良き材料が無ければ到底家を建つる事が出來ない故に何事業を爲すにも此の二つが必要で家を建つる材木が有ッても夫れを活用する上手な業が無ければならん第一には此の材木が必要で充分に良い材木でなければならん第二には此の材木を使ふとを上手にしなければならん。

此頃は色々の矯風會を起し婦人の事に就て矯風すると云ひますが一躰矯風す可き事に充分に深い考へがあり又之を幾許充分に知て居ても或は其の働きを活用させなければ其事の成就しないと云ふ事は間々世の中にある事である故に私はこれに就で二つの必要な事があると思ひます其一つは矯風と云は何をするか若しも其事が明かに分つたならば如何云ふ工合に爲したなら充分に此の事を成就させる事が出來樣かと云ふ此の二つの考へは何の事業を爲すにも明かに必要である併し矯風と云ふ文字は大變に廣い事でありますから或は矯風は髮の結ひ方から或は足の蹈み方に迄も及ぼし誠に空中に城を立てた樣で手の攀處がありません婦人の方はそう云ふ事をお聞きなさらんか知れませんが或る人は此の矯風と云ふ事は大きな事であるから一つの事を定めては矯風を遣る事が出來ません女の女たる可き所の義務を盡して倶に社會を維持して行く其中には酒を禁ずるとか烟草を禁ずるとか其他色々樣々の事がありますが女たる可き者の盡す可き義務を盡し其立つ可き處に充分に立ち何う云ふ工合に進む可きか又其働も何う云ふ事を爲す可きかと云ふに未た日本では新しい事で歷史上に就て調べても日本の例に據つて說く事が出來ません故に今日英吉利亞米利加の人が爲して居る例を引いて論じなければなりません依つて私が自分に目擊した所の樣子をお話し致します。

私が亞米利加に參ッたのは六年跡の事でありますが其摸樣の日本と丸で違ふと云のは女の事計りではありません市中を見渡す所紐育の町抔は其家の建方は五階にも十階にも高く造り廣大な事でありますが是れは何も日本人に感動を與へる

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

事ではありません又亞米利加の、サンフランシスコ、紐育あたりを旅行するに於ては日本とは樣子の違ふ事は何よ人も感しない者はありません、けれども是れが日本人に感動を與へる事ではない又商人抔が其商賣上の取引を爲す樣子は丸で氣違ひの樣な姿で或は人が歩くのゝ忙はしい事は其足が地に附かぬ有樣でありまして或る西洋人の評には日本の銀座通り又は日本橋通りあたりの商人は坐睡りをして居ると云ひましたが併し是れ等の事も亦感じを起すと云ふ事ではありません。

まだ其外に日新らしい所の私し共が尤も深く感動を起すものは男女の地位であります女の大學校であります女の社會に於て其勢力を得て居ると云ふ事は最も著しい事である是れは誰れしも最も感じを起す事であります何となれば女と云ふ者は大層に位地を占めて非常に尊まれて居ります今其一例を擧げますれば市中を歩くにも女と見れば鳶人足や賤人の樣な者と雖も一言葉でも女に言葉を掛ける事は出來ません又酒飲抔は酩酊して前後も辨へぬ者でありますが是れも女に無禮な事を云ふ者はありません之れを觀れば女の社會に勢力を持つて居る事が著しいものであります又書生抔が女の前で失禮な事を云ひ又猥りな言葉を放ち抔すれば忽ち書生社會より擯斥せられ或ひは甚だしきは新聞に出されて斯う云ふ若い者は社會の全躰よりも擯斥せられます之れに反して我が日本の如きは女が往來を歩いて居れば男同士或ひは其他の人の前で其女を評すると云ふ有樣は外國に比べて見て實に悲しむ可きの風俗であります。

又其女の勢力を得て居る事が出來る譯は例へば一軒の家の有樣で見るよ二人の子供があり一人は七ッ位の女の子で一人は九ッ位の男の子なれば其親が何か事を命ずるには譬へば水を汲めとか又は二階にある書物を持つて來いと命ずる時分には日本に於ては云ふ迄も無く女の子に命ずるが當り前の事である、けれども亞米利加の地に於ては必ず男の子に命して女の子は使はぬ事であります一家内に於ても女の子に位地を與へ、る事が通例であります其外男女二人の子供が有ッて其親が一万圓の財産が有れば日本ならば總領息子に讓つてソレから其母親を養ひ其女の子は他處へ遣はすと云ふ有樣でありますが彼の國では一万圓の金が有れば女にも男にも五千圓宛分つて與へます或る時に於ては其親が殘らずの金を女の子に與へる事があります其譯は男は充分に稼げる事あれども女は色々困難があり又障りがある故でありますが併し通例では一萬圓の金

が有れば五千圓宛を與へると云ふが一般であります。
又其外に例になる可き者ハ大概彼國の小學校の先生ハ男でハありません女が小學校の先生になつて居ります中學校も亦た其通り女が先生であります夫れ故に小さな小兒の內から女の敎育を受けて過半ハ女より敎育を受けますから其女を尊ぶハ萬止むを得ん事であります今斯くの如き例を擧ぐれば枚擧に暇まありませんが斯う云ふ工合に違ッて居ります又實際の例を擧ぐれば町を歩き鐵道に乘るに女の人が旅行して重い荷物が有る時分にハ其荷物を男が持つと云ふが禮であります中にハ隨分面白い話があります其時分に鐵道のステーションに於てハ何の樣な立派な人でも女の荷物を提げる事でありまして是れ等ハ女の位地を高められた事であります。
又旅店の入口に男女の相違があります男の這入る處ハ誠に粗末なものであるが女の入口ハ御殿の樣であります夫れ故娘とか夫婦連れハ立派な門から這入れます又鐵道のステーションに於ても女の待つ處ハ御殿の樣でありまして其切符ハ同じ直段であります總べて女ハ男より善い位地を占むるもので女の勢力ハ世の中を治むる事になッて居ります故に彼國でハ色々の事業を爲すハ女であります今日亞米利加で禁酒會を爲したのも女であります御存じの通り此の矯風會も聞く所に依れバ亞米利加と連絡を通じて居りますから其矯風會の目的とする所ハ我が日本の女も男の位置と同樣に一處の位地に立たしむる樣にしたいと云ふ旨意であるが或る人がどう云工合にしたら宜かろうと云にどうしても女ハ亞米利加の樣な位地に登るにハ敎育が無ければならん又肩を並ぶる事が出來ません唯だ女が敎育も無く力も無く何も持つ所の價が無くッて又別段尊ぶ可き直打ちが無い時ハ譬へバ人形を壹圓と云ふも誰れも買手が無いがけれども其品物が八十錢でも直打ちがあれば買手がある尊ばないと云ふても自然に尊ぶ樣になる今云ふ通り女の子も男の子も大概中學校に參りますが亞米利加に於て男と女との敎育を較ぶれば男ハ大學校を卒業する事が出來ません朝から晩まで世の中に奔走して事業に從事致しますが女ハ內に居ッて家族を治むる外に暇まを得て書物を讀みます夫れであるから女が何でも敎育會を立てゝ書物を調べます私が或る一つの町へ參りました時分に廿人位の組を爲し其集まる旨意ハ日本で云ふ敎育會と云ふ者が出來て居る夫れ位に婦人が充分敎育上に進む事が盛んである故に今日婦人が日本の女の位地を高める學校にて普通の敎育を受けねばならん是れが一つ

の矯風を爲す手段であります。(未完)

○

保坊、コレ、起ないか、モー八時だよ。ウウウウーン。コレもう起ないかよ、叔父さんなどは夙つくから起てるものを。ダツテ叔父さんは年とつてるし、僕はまだ子供だもの。馬鹿をお言ひよ、子供はアノ朝の子と云つて早くから起るものだよ。夫でも、叔父さんは五十年も寢たし僕はまだ十だものヲ。

叢話

○小供私己の衞生

大學教授　大澤謙二述
佃與二郎筆記

左は三月廿四日大日本婦人衞生會に於て講演せられたるものなり。

私は先月口演する筈でありましたが病氣の爲めに出席が出きませんでしたソレデ最初は小兒の衞生と云ふヿに就てお話し仕樣と思ひましたが今日は只其一部分に止め公衆の衞生は省きましたから私己と云ふ二字を加へて戴きました且つ私の小供と申しまするのは生れた時から十四五歳に至るまでを指して申すのであり升。

皆樣も御承知の通り植木屋の木を育つるにしても大きくなつてからは枝を曲げるにも思ふ樣にはなりません人間も其通り小さいうちから早く注意して曲げねばならんイヤ曲げるのではない曲り易いから曲らぬ樣に眞直に育て樣と云ふのです或人は小供は生れぬさきから注意するが善いと云はれたが固よりそれには違いない併し私の今日演るのは生れてからのお話しです。

私己衞生と限りましても其部を分れば幾らもあるヿで第一は小兒の養ひ方第二は皮膚の養生着物のヿです第三は小供の住ツて居るべき所即ち居間寢間等のヿ次は呼吸器のヿ次は筋骨の作用眠ると又其次は小供の五官精神と云ふ樣な工合に中々申上るヿが澤山あります此順を逐て次第に說て參り升。

第一、小兒の營養には如何なるものを食べさせたが宜しいか申し上るまでも御座いません乳です乳に過すものはありません然らば何時から飲ませたが宜しいかと云ふ問が起ります或は生れてから二十四時間位親の乳は飲ませずに「マクリ」でも飲ますが可いと云ふ說もあるが是れは產のあッた當座は乳が出ないから箇樣のヿを申すのでありませう只今申す通り乳に限るので「マクリ」抔を飲ませるには及ばん却てわるいです產湯をつかつて眠て目がさめた所で乳さへ出れば直ぐ飲ませて宜しい若し永き間乳の出ない樣のヿがあれば其時は牛の乳を飲せる乳一分に水三分とソレに少し砂糖を加へあたゝめて與へるが宜しい。

次には乳は幾度位飲ませれば宜しいかと云ふ問がありますが是

迄人の氣を注けた所を承りますに生れた日には二遍か三遍二日目には六遍から七遍飲むと云ひます私も氣を注けて見ますに必ず然うも參りませんこともあるが大抵は其位です後には次第に度數がふへると云人もあるが夫れは親の方から殖してやつたと云ふ位なもので小供の飲たがるのは凡そ七度位です即ち三時間か三時半毎に飲のが常です生れた當座は夜と晝の界がありません段々日が經てば晝の間は二時間毎に飲む樣になり夜る乳を飲むのが少なくなつて後には夜分全く乳を飲まぬ樣になります是れは慣はし方によるものですから何時までも晝夜の別なきは畢竟するに親の慣わせ方が惡るいからと云ても宜しい。

次に乳を飲まする時刻只今申した通り一日七回程飲むとすれば其飲ませる時を定むるが必用であります大躰一度飲んだ乳は一時半か二時間位は小兒の胃の中に這入て居るから然う度々飲ませるのは宜しくない故よ二時半位毎に飲ませるのが宜しいです夜中などは飲ませないでも晩の十一時から翌朝の五時位までは飲ませるに及びません是れは氣の附け方ですが往々泣さへすれば飲ませるので或は可愛想と云ふ考から出たのでありませう又泣くのが五月蠅いから泣かぬ樣にと云ふのでありませうがソレが慣になれば飲みたくなると泣く樣になりますから成るべく今申す通り晝の間に餘計にやつて夜るは泣ても飲ませぬと定めて置くが宜しい此注意が届けば夜分大層に母親の骨が折れなくなります。

次に一度飲む時間は何うか是れも氣を注けて居つた人の話ですが大抵二十分から二十二分位で一度分は飲み終るものです丈夫の子なれば十五分位時としては一寸飲んで止め又二十五分も三十分も飲む時もありますが大概は二十分位と申すことです扨又乳を飲せて仕舞つた時の注意がある小供が少し大きくなれば巾か布を水に浸して口中をふくが宜しい乳を飲ませながら眠る樣なことがあつてはなりません其爲めに口中の病を起すから氣を注けて拭くが宜いです又乳を飲ませて直ぐと動搖る樣なことをしてはなりませんソレから母親も乳首を布で拭くと是れも乳首の養生です乳を飲ませて居る間は母親の營養も成るべく氣を注けなければならん即ち消化易き鳥獸の肉とか卵とかを食ることです酒なんどは惡るいことは固よりです序に申さなければならぬことは授乳の間に藥を飲むことです親の飲んだ藥の爲めに小供に中ることがあるから手前療治などは氣を注けねばなりません。

いゝや、乳を廢めるのは何時時分が宜しいか私も問はれたこともありますが是れは歐羅巴と日本とは違ひます歐羅巴では早きは九ヶ月遲きは十二ヶ月即ち一歲です此地等では一歲ぐらゐで廢めるのはありません後に小供でも出きれば無據しにやめるが二年も三年も田舍などでは隨分七ッ位のものが母親の乳を目がけて斷つけるのもあります是れは長すぎる早く廢めたとても決して害のないもので氣の毒でも可愛想でもありません唯乳を廢める時の養ひ方に氣を注けなければならぬのです又乳を早く廢めるとは母にとりましては必要のことで殊に丈夫の身なれば格別弱い人なれば永ければ永いだけ身躰が疲れるソレハ然うで御座いませう自身のからだになるものを小供に分けるのですから夫れだけ減る筈です國によつては乳を飲ませると「フケル」からと云て生れて直ぐ乳母にやつて仕難のもあるソレモ餘りだが永過るのもよくはありません或人の云ふにはソレモ尤もだが爰に一の氣を注けなければならぬことがある一躰小供は澤山有るのが宜しいか少ないのが可かと云ふに人口の少ない國では多いのが宜しいでありませうが隨分人口の多い上に續々と出きるのも困る日本などでは國の幅員の割合では然うでもないが商買其他一般の狀態では人間は隨分澤山です子供は餘り拵へないでも宜しい然るに乳を早く廢めれば子が早く出きる歐羅巴人に年子の多いのは其爲である依て日本では餘り人に勸めて早く乳を廢めさせるのは宜しくない抔と云はるゝ人もあります併し此事は今日の御話に必要なる關係はありませんから別に述べませんが私は一年から一年半も經たら乳を止めさせる積であります扨乳を廢める時は何う云ふ工合にするか母親の乳をやめたら姑くの間牛乳を飲ませるが宜しい然し牛の乳を其儘ではありません其薄め方は後にお話しします初は七遍飲ませる者なら一回だけ牛の乳とし其次は二回三回と牛の乳を增し母の乳を減す樣に致して牛乳に馴らすです其次にはソップとか魚とか丁度日本で齒の生へかゝッた時トヽと云ふことが出きれば魚を食べさせると云ふ一年少し過ぎた頃です其頃には鳥や魚の肉又御飯などで次第に牛の乳を減らすことをしなければならん然しながら十分に咬こなすことは出きませんからお粥の樣に軟かに拵へるです若しも牛乳が無いとか又下痢を起すトカ云ふ時は仕方がないからソップの中へ鷄の卵の黃身を入れて與へるが宜しい黃身は御承知の通り一個の雛になる程ですから十分に乳と同じ効力があります又お粥ばかり食させるなどは惡るい田舍の人は餅などで養ひます

耕霞女史

が宜しくはありませんソレニ乳を廢めさせるに夏はよろしくない是れには種々の原因もありますが先づ下痢を起し易いと中の乳などハ變り易いからなどであります。（未完）

○プライニー其夫に送るの書

吾がカルフハルニアよ、君が御歸りの程を待つ吾が心の何如に切なるやは之を申すとも殆んど信じ得られぬ程にて候、左れど此は君を思ふ心の愛情にして必竟は嘗て御別れ申したることもなく此度初めて斯る憂ひに陷いりたるゆへにて候よ、吾れ夜中大抵は君の事を思ひて眠りも致さず、時に兩の足に載せられて常もの如く君が部屋に至りて見れば君居まさず、すご〳〵として歸る時は恰かも否まれたる戀人が望を失ひ悲歎に迫まりて家に戻るようの心地せられ候、たゞ〳〵斯る憂ひを消して暫しだに思ひを休め候は法廷に出でゝ裁判の務めを爲すの折り及び友人等の爲に事を辨ずるの折のみにて候、そも仕事を執りて漸やく心をまぎらし群集の間だに入りて初めて慰めを得候は何如に憫れむべきものにや候半御察し下されたく候かしく。プライニーより

○木村長門守の妻其夫に送るの書

一樹のかげ一河の流れ是れ他生の緣と承はり候にころそもおとゝせの比よりして偕老の枕をなしてたゞ影の形に添ふが如く思ひまゐらせおもハれまゐらせ候此頃承はり候へバ此の世限りの御催しのよし蔭ながら嘻しくまゐらせ候もろこしの項王とやらむハ世に猛き武士なれど虞氏のために名殘をおしみ木曾義仲ハ松殿の局に別を歎くとやらされバ世に望み窮りたる妾が身にてハせめて御身御存生のうちに最后を致し死出の道とやらむにて奉待上候必ず秀頼公多年海山の御鴻恩御忘却なきやうねがひあげまゐらせ候めで度かしく。妻より

○古今女風の比較（其二）

鈴木弘恭演說
塚本ふじ子筆記

さて古への男女の中ハ外面より見た所ハまづ此の通り男女同權に近き風俗でありましたが如何して甚しき男尊女卑の風俗になつたであらうといふと其原因ハ又たくさんあるが第一男子は學問をするが女子ハ學問をせぬ事となつた故に男子ハ利發にして女子は愚鈍なる有樣に立至りたるが一の原因であります是れを虛言だと思ふなら考へて御らんなさい紫式部清少納言の時代には女の學問が盛で女學者が澤山にありましたが當時ハ女が貴とばれたとハ歷史上にも見えてあります。第二ハ男子は資産を所有してあるが女子ハ資産がない故に衣食住は勿論わが頭のさきより手足のさきまで悉皆夫の世話に

なつて居りますから其の妻ハ少しハ無理を云はれても夫に向て一言もいふことが出來ないであります今試に越後あたりの風俗を御覽なさい(中等以上は左樣でないが)下等社會になると女尊男卑といふありさまで女子の勉强は遙に男子の上に出て荷物を運送する或は機織を力むる日々二三十錢の賃金を取りて夫一人子供の一兩人はその妻一人の力にて食せて置くといふ位であるから亭主よりは內儀の方が權がある道理である今東京にても船宿や揚屋などの女房を見てもしれます女房が才智辨舌を以て御客を招き立派に家計を立て居るから夫を目してヤドロクとかノロスケとか呼びやがて妻の爲めに夫は奴僕の如く使役せられて甘じてへイ〳〵ハイ〳〵と平氣のへいざで居りますから此の社會等はやはり女尊男卑であります是れ男女に限らず獨立することが出來ざれば獨立したるものの助力を受けねばならぬがその受る方は卑しいに極つていますから女子の資産のないのは第二の原因であります。

さて此の二の原因より照らして見るとどうしても學問するが第一である故に近來女子の學問が大に盛にありて競て勉强し給ふは寔によろこばしきことにて是こそ男女同權となるべき基礎でありますが現今の實況では女生徒よりも男生徒の勉强が優て居るやうですから貴孃等なほ今一層ほんきになりて益勉强して其學力を養ひ其才智を廣めさして資産を有するやうになつたならば今に引かへて男女同權は勿論のことで或は女尊男卑となる事もむずかしき事ではありませんがたゞ學問も勉强せず怠惰て居ながらに男女同權を願ふは俗に果報は寐て待て牡丹餅は棚にあり晩かれ早かれ我が口へ轉げ込むべしと宛もなきことを待つと一般にて馬鹿〳〵しき事ではありませんか因て貴孃等ともかくも憤發して學問を勉强し獨立すべき資力を有して男子と竝立していさゝか男子に劣らざるほどの女子となり給へと思ふ老婆心を談話申たのであります。(完)

○下婢のつかひ方

先づ下女端た女は口の善惡ないものと申してはあるが、なか〳〵、たゞ口が惡るいのみではなく、其の心からして主人のお爲めを計ると云ふようあるは、千萬人の中に一人とはなからうやに思はるゝです。井戸端の會議に、奧サンを彈劾し、お出入の八百屋に御家內の落度を洩らし、姑舅に告げ口をして時々の鼻藥を嗅ぎ、肴屋に慣れ合つて工錢を取り、薪屋よほのめかして、盆歳季手拭一とすじの進物を促がし、時にお乳母の代りをしては陰で坊チャンの頭に拳骨を呈し、其の

癖母様の前でハチヤホヤと云つて菩薩の如し、兎角人前でハ汗を流して、見ない所ろで居眠りを爲し、表てにおためごかしを言つて、腹の内に舌を出だす、ト云ふが當今の下婢氣質であると申す。殊に京濱を初め、凡そ繁華なる土地に於ての召し使ひと云へば、大抵盗賊氣の無いものとてハなく、稍ともすれば、物をくすねて、之を外に扱かすの工夫を凝らす、故に一升の醤油二日でなくなり、ツイ漏つて仕舞ましたと云ふもあれば、一斗の米三日で底を拂らひ、今度のは大層量りが惡う御座いましたと、忠告するもある。下婢の行狀すでよ斯の如くなれば、細君も亦た之を信任の仕様が無い、成程之を信じて其仕事を任せようと思ふても、斯る盗賊、斯る不忠の臣に、其の政事の秘密を打明けるとハ出來ない筈である。然し茲に至つて一の注意すべきことあり、成程下婢の人と爲りが元來宜しく無いには違ひないが、亦た之を使ふ所ろの人次第にて、或は稍や宜しくもなり、或は又一層に惡るくもなります。喩へば、下婢ハ悍馬の如きもので、隨分之を御するには面倒であるが、然し恩と威と、チドシと惠みとを甘まく調合して、且つ無理の無いように之を使へば、本來馬でない、一個の眞心を持つたる人間であるから、必しも左様に惡るひものでは無いです。苟くも主となり、家來となるは、一樹の緣淺からぬ因緣である、何も七生よりの敵きではないと云ふことは、何如なる下婢にも分つて居りまするから、若しも當人の利益になるよう、當人のハゲミに成るような工夫を以て、之を使うならば、彼の惡ひ僻のある、悍馬の下婢も、知らず識らず、忠實なる秘書官となることであります。

左れば今の下婦の惡るひのは、何も悉く下婢自身の惡るひ許りでは無い、之を使ふ所ろの主人、特に之が第一の主人と爲つたる、當の細君の使ひようが宜しくないゆへにも因ることであります。其の家は、細君に取ては身分の家でありませうが、下婢に取ては、もと〳〵、他人の家であります。故に此の家の事を思ふ情が、自然に薄いは當然の事で、無論細君の思ふように心切でないは、知れ切つたることです。然るに下婢が、其家の事を忠實に思はないと云つて、徒らに之を不平に申すのは、眞とに人情を知らん考への足りないことであらうと思はるるです。夫故へ、物事を冷淡に見て、人の心を穿つて考へますると、細君は、薪一本餘計に入つても、炭一俵多く使つても、直さま自身の利害に關することであるから、其の注意に注意を加へて心を配ばるは當然であるが、彼の下婢に至つては、

痛痒殆んど之に關せずとでも申さうか、實際之れと云ふ直接の損益が無いことであるから、自然に疎そかに思ふに至るは、實に免ぬかれんことであります。故に細君は、よく／＼此の人情の極頂を承知し、人間は利益の爲め、恩義の爲めに、動くものであると心得て、平生其の積りで下婢をあいしらわんければならぬです。

然るに、今の細君方は、彼の下婢が眞正の下婢であり得ぬ通りに、御自身も亦た、眞正の細君であり得ぬ樣に見へます。昔し或る皇帝は、人間は八時間眠り、八時間働らき、八時間遊ぶべきものであると、申されましたが、固より何人も皆な此の通りに行ひ得ると云ふ閑人の無いにせよ、眠らねばならぬ丈けは、如何なる人物でも亦た眠らねばならぬことです。然るに、細君は九時より眠つて、朝は八時比に起き乍ら、下婢は夜一番に遲く眠らせて、朝は一番に早く起こし、而して居眠りをすれば、口ぎたなく叱ると云ふは、實に殘酷なことです。己れが遊びたければ、人も遊び度ひ筈で、況して、己れの身代でない人の爲めに使はれて居ると云ふ奉公人は、尙更ら遊び度ひ筈であるを、己れは度々物見遊山に行つて、下婢には半年に一度のヒマをも、心持よくは遣わさんと云ふは、又實に殘酷なことです。己れが御馳走が食べたくば、況して一日働らいて居る奉公人は尙更ら之を戴きたい筈で、特に彼等の爲めには、三度／＼の甘いものゝ外は、別段の樂しみと云ふものはないことです、然るに自身は高膳で肴を食べ乍ら、奉公人には遥かの向ふで、ヒツキで茶漬を食べさすると云ふは、是又尤も殘酷なることであります。其上下婢が骨を折つて働らいたる時には、夫相應の褒美を遣るとか、又何年か正直にして勤めたらば、是々の報ひをするとか云ふやうに、定まつて居らば兎も角、何れ程、お爲めを思ふても椽の下の力持で、イクラ働らいても、暗夜の盲目同然、少しも之を知つて下さると が無いと思へば、自然に骨を折る心持の無くなるは、當然の事であります。必竟、下婢は教育のないもので、隨分分らないものである、決して何れも／＼が伯夷叔齊の如き忠臣でないと云ふことを、能く勘辨しなくてはならん。そうして萬事彼等の勵みになるように、彼等の利益になるように、彼等が有がたがるように、召し使ふならば、何如に無教育の頑なるものと云へども、決して左樣に惡るいものでないです。左れば西洋には、家婢を仕ふの心得と云ふことが、家政學の一科と爲つて居て、凡そ細君は皆な能く此を學ぶことであるが、日本

の細君の如く、生來貴族主義の敎へを受けて、其上、奴隷を使つたる封建政度の餘習に染みながら、尙ほ其上に、下婢召使ひの心得一ヶ條をも學びたるとの無い人々には、只今の如き無理なる使ひ樣のあるは、實に免れんとであるが、此の無理なる使ひ樣のあらん限り、下婢の不信切を極むるとも亦た免れんとである、而して事情此樣にて續かん間だは、細君と下婢とが水魚の如くに、仲好く相成らんとは、是亦、到底望み得がたきとであります。

小說

第三回、親なればこそ子なればこそ(下)

石橋忍月

○都島、

波「今お話し申します通り誠に憫然で御坐いますから連れて參りました、私は人、一人助けたので阿母さんに褒められはしますとも叱は受けぬ積りで

咲「さうかヱ、さうした譯なら何だけれど、妾は又……たが女と云ふものは我儘なものだから餘り𢤇れ〱しくしてはいけないよ

女性の感情は銳敏なり緻密なり、女性の眼は濃厚なり顯微なり、されば母がば八重の動作に注意するは波之助に優る數十等、れ八重が些事に配慮するとも亦波之助の眼は之を受け入るゝ能はざるべし「器量と言ひ言葉と言ひ行儀作法まで誠に上品で」とれ八重を敬ひ信ずるの先入心、母の惱裡を支配せしより爾後れ八重がするとなすと愛で度も見え貴うも見え又有難くも感ずるやうに至る、雨の朝や雪の夕に「アノおふくろ樣お淋う御坐いましやう昨日の新聞の續きを讀ましやうか」「炬燵のお火はありますか」なぞと氣嫌氣褄を取るいぢらしさ、まめ〱しさを見につけ母は不憫さ彌增り「あの子も自分で双親がないと思へばこそ他人の妾にハイ〱と……眞實に若いに似合ず、いかい苦勞を重ねるな」と心の中には無限の感動初めの不興顏は不憫と變じ此不憫は終に一種不可言の心配と變じたり、其心配の種は何なるや、母の外之を知るに由なしと雖も孰れにせよ容易ならぬとと覺しく母は召使の老婆に何事か諄々と丁寧に親切に言ひ置して「墓參かた〲島渡歸ッてきます」とて突然仕度して西京の本家に歸る

筆鋒轉して海路二百里を距りたる京都三條富小路園井本家お米嬢の坐敷に向ふ

暮れゆく月日も一ツ二ツ三ツ、三年隔てし其以前吾妻の都に旅立

玉ひし我君は今は如何してお在らん、風につけ又雨につけ思ひ出すは東の空、月にも花にも樂みハ未來の夫が業就り名遂げ玉ふの日、「別れにしその日ばかりハめぐり來て又も返らぬ人ぞ戀しき」とは上東門院の女房伊勢大輔が果敢なき浮世をかこち歌、それとこれとハ事變れど思ふ心の切なるハ爭でか中に深き淺きは知らん、君が門出を送りにし吉野の山は再び去年の春を粧ひ君が歸りを迎るに嬉き逢瀨は何とてかく迄に遲きぞやゆかしき音信は何とて惠み玉ハぬぞ故鄕の春はなつかしく思召さずや吾妻の春ハ何とて君が足を繫くとの永きや志を立てゝ鄕關を出るの日「米もまめで暮せよ」と姚しく殘した波之助の一言、先祖代々より傳ッたるお家の重寶の如く珍重し丁寧よ胸に疊み丁寧に保存して時々出してハ分析し藏めては保合し或ハ團めて無形の春塘を作り或ハ重ねて氣中の樓閣を築き或ハ碎いて想像の花園を色どる、思ひつゞけて此日頃深窓籠居蛾眉を顰ると有りと雖も自ら名狀す可らざる喜怡の色、面上に潮すハ全く絕望の境遇に陷りしにはあらざる可し、さりとて又快愉の春野に逍遙するの身の上とも受取難し、

米　此寫眞は阿母さんが此間東京から持ッて來て下すッた、兄さんも此地にお在の時分は大層瘦せてお出なすッたが、此で見ると余程肉が附て血色も美しくお成ンなすッて‥‥時々は妾のとも思ッて下さるか知ら、阿母さんがお歸りになるのにお手紙の一ッ位は‥‥妾は今年になッてモウ二度差上たけれど一度も兄さんの方からハ、けふ阿母さんが「波さんに安着の報知を出すから、お前も同封でお出し」と被仰ッたから書くとハ書いたけれど上封がこれでは‥‥

幾度となく書直した雁皮の紙片を一ッに丸めて机の下の紙屑籠に入れ机の引出より狀袋三四枚取り出し「おん兄さま參る、米ゟ」「兄上樣御許へ、よねゟ」など書列べ色々見比べて其中上出來の分二枚を撰み筆を持ッた儘右の手で頰を支え暫く考えてゐたがフト決心したやうに「兄上樣」の肩書に「戀しき」と小さく記し再び見守てゐたが氣に叶はぬと見え「戀しき」の三字を黑々と塗抹しをまけに憐む可し無辜なる狀袋は寸斷と云ふ斬罪に逢ふて終に机の下なる列の墓地に葬られた」世人若し「仇氣ない」と云へる語ハ如何に解釋す可きやと問ふ者あらバ作者ハ之に簡明なる定義を下し能はざる代り此女の擧動、風姿、意想を其儘そッくり示し是が即ち「仇氣ない」の適例なりと答へんと欲す

臺所の方より何かヒッ〳〵と小走りに(足音のせぬやうに)來

る四十五六の年增、入口に立止りツット坐敷を指覗き「眞實に世話の燒けるお嫁さんだよ」と口の中

女　お孃樣まだ出來ませんかお手紙は

その高聲を聞て吃驚膝の上の寫眞を急に袂に隱し

米　マア、いやな婆アやだよ人が一心にアノゥ裁縫の事を考えてゐるのに斷りなしに呼ぶやうな不躾な、不遠慮な‥‥

女　ハ‥‥お斷りなしにお孃と呼たのが不躾、そりや德が(自分の名)誠に惡う御座いました、今から用が有てお呼び申すときは、サアお孃樣今呼ますよと斷りましやうハ、、、

米　だッて物を考えてゐる時は誰れだッて吃驚するワ

德　モウ、何もくよ〳〵とお考え遊ばすにや及びませんよ德がお附添申してお孃樣と一所に二三日の中に東京に行くのですッサ、阿母樣が眞實にさう被仰ました、それで阿母樣がネ其事東京に知らせてやるからお孃樣のお手紙も早く貰ッて來ッて被仰ました、お孃樣貴女嬉いでしやう

米　妾、そんな事知らないよ噓ばッかし

德　アラ眞實ですよ、こればッかしは眞實

米　噓だよ知てゐるワ人、それなら阿母さんが妾に先へ被仰る筈だもの、お前、そんなと言ッてさん〳〵からかッて跡で笑ふと思ッて誰れが、だまされるものか

德　それぢや宜う御座いますお孃樣が東京に行くのがお否なら德獨りで行けと阿母樣が被仰ましたからそれぢや德ひとりで行きますよ

米　婆アや眞實かエ

德　眞實ですともなに噓いふものですか、ネエ嬉いでしやう

と笑ひ乍ら首をかじけてお米の顏を下から覗く

米　ホ、、嬉くはなけれど‥‥‥だがマア七八日、間があるといゝネ、二三日の中ッてそんなに早くは

德　なぜです一日でも早いがいゝぢやありませんか

米　イ、エ、否ないよアノ齒のお醫者樣に行ッて前齒に金を入れて貰わなけりや

德　ハイ〳〵それにアノ染物のお仕立もまだ大丸から持ッて參りませんから、それはさうとネ、お孃樣東京えお出で遊ばしたら今迄のやうぢやいけませんよ、東京には氣のきいた女が澤山ゐますから今迄のやうに、おぼこではいつ迄も埒が明かず其内に他に何だと、いけませんからネ、ちよびくさ咄しもしかけたり人のゐない間にお傍へ寄ッてつめッても見たり‥‥‥‥

勉強なる注意深き生徒が信用したる教師の講義を聞く如くに謹聽してゐたるお米孃は一心に自分の膝の邊を見守め乍ら

米「お止よそんなこと子供ぢやあるまいし、ホントに徳は多辨だよ

佳傳

○ナポレオンの母

赤手天下を横領し雄名を青史に垂れ千載の後我等をして其業を逐ひ其名を慕ハしむ彼の佛帝ナポレオン、ボナパルトは實に絶世の偉人にして復見べからざるの英雄なり即ち世界獨一の產物にして開闢以來二千餘年の久しき未だ甞て其類を見ざるの人其業と其功は歐洲活劇の第一機關にして歐洲歷史の大部を占め其名は赫々として万世に輝き豎兒も尙其績を稱して其業を知らんと欲し丁童も尙其擧を聞きて其跡を知らんと欲す而して我等の姉妹は更に進んで其母は如何んの人なりしやを知らんと欲するあるべしこれ玆に聊か述べんと思ふ所ありされどナポレオンの母レモリノ、メリー、レチチアにつきてはこれまで多少傳へ聞かれし事もあらんずらんと思ひ今玆には最も著しき點のみを擧げ讀者の欠伸を避けん。

先づ第一に著しき點と申すは其容色の絶麗なりしことにこそある聞年甫めて十六チャーレス、ボナパルトに嫁ぎ八十回の霖雨凍雪に逢ふも尙其色を衰へざりしと殊に恐れなき勇氣と堅固なる意志と千里を見るの明と外界に制せられず能く斟酌能く適應するの能力は額の間口の邊に顯ハれて且つ義務を重んじ道義を尊むの念は自づと外面に顯ハれて一入の目立ちありアブランテス侯爵夫人云へることあり「レモリノ、メリー、レチチアはコルチカ全土第一の美人にして形骸を透して外面に光を放つ心中の玉は實に高尙なる感情をもて滿たしたるものなり」と穿ち得て妙なる評と云ふべし。

又其子女を教育せし有樣につきては現に其撫育を受けしナポレオン云へるあり「……我母の柔和は嚴壯と交も交わりて賞罰偏らず等しく行ひ玉へば善も惡も凡て我母の前よりは遁るゝこと能ハず……又常に我等の惡に陷らざるや善にや進むやと思ひ煩ひ給ひて我等を吟味し玉ひ少しにても下等なる思卑き情の起らんにはこれを耻め辱しめ如何にせば我等少年の心を啓き高大なる基を据へうるやとのみ只管に憂ひ玉へり然れば食言の如き不順從の如き最も卑め嫌ひ玉ひし事になんと又幾分か推し知らる。

次に我等か大に驚し事は其先見の明ありし事なりナポレオン既に佛國に勢力を得て其兄弟皆列して諸國の王侯となりボナパルト一家の隆盛は譬へん方なく其勢盡くることなく何時衰へぬるらんと思ふ者のなき時に當りて賢母メリー、レチチアは獨り昔を忍びて今を憂ひ身を謹しみ常に自ら恨らく彼等諸國に王となりて榮耀を極むる我子等は又我に來りてパンを求むるの時あらんに誰れかこれを知る者あらん」と獨り自ら憂ひしとあん又ナポレオンがフオルスト、コンソルの位に即きし後羅馬法王の所置につき其當を得ざることありしにや母メリー、レチチアはカルチナル、フェッシュに云へらく「ナポレオンもし斯くの如くにして其方向を改めずば必ず其身を災し又引きて我等をも艱まさん彼もし今在る地位に止まりなば可きに餘りに多く握らんとて遂に其全きを失ハんア、我家族零落の報を聞くも近きヿ在るか我等宜しく雨ふらざる前に窓戸に糊すべし」と其言違ハず日ならずして身は遠島の鬼となりて家族は四散五別の慘狀を見しと云ふ。

其次に見るべきは夫人が剛毅なりし事ならんか彼のナポレオンが不能の字を字書中より抹し去れ天下爲すに於て成らざることなしとてアルプスの險阪を踰へ以て大勝を得しことと我等が喜びて史上に讀む所にして偏にナポレオンが剛毅なりしことに驚く而るに今母メリー、レチチアの傳記を讀みて更に驚くは母公が剛膽其傳の始終に貫きナポレオンが剛毅は只これ母公の遺物あることを知りしことあり茲に趣は少し異なれと面白き例ありナポレオン佛國皇帝の位に即きて漸く宿望を遂げたりと思ひ居りし折不圖母に後園に逢ひしにナポレオンは半ば滑稽て手を差出し母に接吻せよと云ひしに母は嚴壯なる容をあし「爾を育てし我にこそ接吻すべきに」と其手をハチのけ玉ひしとなん時にナポレオンに從ふ百官も多くありしにそれをも憚らず又我子の榮耀をも喜ばず尚母の權を保つの殊勝なりとて賞むる者も多かりしとなん。

●寄書

○花のさかり　　佐々木信綱

花のさかりになりぬれば、人こそ山にみちにけれ、
　しのぶが岡は廣けれど、所せきまでつどひきて。」
しのぶが岡をとひくれば、さくらの花に埋もれて、
　まことに雲の山人と、佛は貌のみ見ゑにけり。」
隅田の川のさくら花、雲か波かと咲きみちて、
　さかり今戸のわたし舟、いとなきころになりにけり。」
汀の浪もかをるなり、をとめの袖もにほふなり、
　すみだづゝみの花ざくら、川風清くわたりきて。」

○王昭君　　同

思ひあがりしわがかげも、やさしきまでにおとろへて、
　うつす鏡はくもらねど、心はへるゝ時ぞなき。」

ひなのすまひにおとろへて、目に見る物もきく物も、
かはりはてしをうのかみに、かはらぬものは月のかげ。」
難にすむ鵜のわれからと、くいの八千度くやめども、
かひなきものゝ今更に、思へはうらめし浦うらごと。」
北ふく風の行末も、南より來る雁がねも、
朝な夕なに身にしみて、たゞ戀しきは都なり。」

●宮廷錄事

○行啓　皇后陛下には去る廿日華族女學校へ臨ませられ教場御巡覽の上午後三時還御あらせられしと云ふ。

○臨院　有栖川一品親王殿下の御息所には去る十七日數人の貴婦人を伴はれ東京慈惠病院に赴き親しく患者を慰問ありし由

●新　報　（本欄内の記事は自由に轉載するを許す）

○（有限責任）婦人勸業會社の實況

此度市川寵、千品巡、武久才、山内幸、山本琴、松村脊、三宅脊、福岡輝、三宅千代、北村直（以上婦人）及び飯田和仲、渡邊齊、三宅新、篠田行、増田侑、（以上男子）の十五氏發起人及び賛成人と爲りて下谷西町四番地に婦人勸業會社なるものを新設せらるゝ由の報あり去廿三日本社員が同所に趨りて之を尋合へせる處ろ西町四番地即ち元と台東學校の在りたる所に創業假事務所を設け男女十餘人居合へされたり會社定欵なる者を受て之を見るに株金六萬圓と定め之を六千株に割りて一株を十圓とし株式四分の一即ち一萬五千圓は發起人受持とし其余は一般に募集し拂込は四期に分ち四ヶ月間に一株に付二圓五十錢宛拂ふべき定め也。事業は婦人工塲なる者を造りて尋常特別兩種の女生徒を敎へ凡そ三十日にて簡短なる仕事を習へせ直樣相應の職業を附し其製品を附屬の勸工塲に陳列して女子の手のみにて賣捌かする趣向のよし。右會社の創立に尤も盡力したるは山内幸女なるよし然るに同子は此度發起人を脫したりとの事に付是をも尋ねて其由を問合せたり聞く所ろによれば同子が親戚に舊自由黨員と爲れるものあり此度の會社結合も何か其邊の關係ありやと疑へれたるものか每日お上よりの吟味あれば面倒なりとて發起人を辭したる迄にて異事なしと云ふ。尤も同子が此の會社創立の志を立てたるは昨年の秋以來の事なるよし然るに假事務所に於て三宅新氏の直談に由れば其の結合の實際に着手されたるは去月來の事と云へば眞に尙ほ手初の塲合なり而して同所に於て何か見本樣の細工物は多少製造し居られたるを見たれども三宅氏の談に既に外國よりの注文あり種々のヲレへを造りて輸出したりとありたるは少し早過る樣に思へれて心中に怪しみたり。偖又發起人の株金一萬五千圓は今月末迄には調べき所ろ下谷警察署より每々の尋ね合せもあれば明廿四日正金を持出でゝ之を證する積りなりと語られたり」要するに、如此き目的を有する會社の設けらるゝは眞に結構の事にて婦人授產の爲めに大ひに慶賀すべきもの也、而して此事に盡力せらるゝ諸氏の勞少なからず吾人は女學の爲に謹んで之を感謝すると共に發起人中に更らに名の知られたる更に實力ありと世に知られたる人々を加へられなば世上の信用も又更に張くして諸氏の勞苦は反つて大に滅ずべしと思はれ少さか一言の愚衷を呈す。

○修身職業英和女學校　佐々木とよ、潮田ちせ、竹尾こと、及びスペンサー孃等即はち東京婦人矯風會員達の盡力によりて此度飯田町五丁目三十番地に題號の如き學校を開かる之は矢張り禁酒主義の敎育を主として專ぱら洋服裁縫、修身科風琴及び英語等を敎授せらるゝ目途の由也。

○女子部設置　本所松坂町二丁目の江東義塾にては今度女子部を設ふけ五月一日より始業すると云ふ。

○唱歌大會　府下十五區六郡の各公立小學校尋常科三年生以上の女生徒凡り三千余人は去る廿二日日比谷練兵塲に會して唱歌の大會を開きし由。

○叢報　府下にて產婆會設立の計畫あり○哲女館にては洋服裁縫簡易科を設け三十名の入學を許せり○淑女以文會は去十五日春期大會を開きたり○福岡女學校にては去十日學校内にて其株主總會を開きたり○東京唱歌會本月十五日より始業の處五月一日まで延期したり○越後長岡に於て去る廿日婦人懇親會を開き米國婦人の演說などもありし由○東京女學にては生徒の定員を增し臨時入學生を募集せり女子職業學校にては造花圖畫編物刺繡等諸科の生徒を募集せり

○子供のはなし

忠實なる家來　（其二）

始終を打ち聽く丈次は喜び我か謀も十分に成れりと喜びの餘り一瓶の酒を傾け快よげに船の頭に眠りたり忽ち三羽の鴉あり何所より來るや知れす船を過きて泣く其聲人の語る如く先きの者の云ふ皇子は姫君を得たりされと此船陸に付かん時一匹の馬來らんもしこれに乘り玉はゝ忽ちまち天まで飛ひ行かんサテこれを遁るゝ方法は第二の鴉はこれを受取りもし其人炮を出して馬を射は其難を遁るべけれど茲に一の危難は婚姻の宴に姫君踏舞をなし玉ふとき忽ち氣を失ひ死するに至らんこれを救ふの策はこの法なりと第三の鴉は申すやう其時人あ

り若し姫の右の胸の血を取らは救はれん然し其人は遂に化して石とならんゆへにこれをなさん人は主の爲めに己を棄つる人ならではかなはずと云ひつゝ飛ひ去りしが忽ちドット舟にこととうる物あり目を醒し見は船は既に陸に着きて最の鴉は夢なりき然るに不思議なるは鴉の云ひし如く一の駿馬の來りしにこそ丈次は急に其馬に乘り炮して其馬を殺しました御者は怒りて若君に申し上けしに若君は丈次は忠實なる臣下なり彼か爲す所に任かせと命せられました丈次は我なから不思議に思ひ宮に歸りて後も倘意を用ひ若し宴席に鴉の云ひし如き事あれは誰れか其身を殺して主を救ふべき吾こそ一方ならず主の恩を受け居るに今回の事の如きたとひ好き果はありたるにせよ前主の遺言に反きたる段我罪遁れ難しされは此回の事も我身が始めなれは彼時死するも只我身のみと決心し樣子如何にと待程に鴉の言に違はず踏舞は始まり若王は姫君の手を取り踏舞せんと立ち出でしに忽ち色靑ざめ氣絶へぬ丈次は此の時なりと身を跳らし姫の右の胸の血を絞りしに忽ち蘇生いたしました王は大に喜び玉ふと雖も其行業餘りに無禮なりけれは怒りて獄に下し死を命じました將さに刑に處せられんとする時王は言ひ遺すことなしやと流石に昔の事抔思ひ出て不憫に思ひ尋ね玉ひしに言ひたきことありとて夢に鴉の話をきゝしことと及び其鴉の言に從ひて一身を拋ちて主を助けし事抔申し上げしに若王は忽ち御座を下りて手づから繩を解き放ち玉ひしに不思議や今まで物言ひし人の今は既に石となり果てしに王は悲嘆措きやらで其石像をは己が室に運び入れました暫くして姫君皇子を産み玉ひしに御二方の御寵愛一方ならずをわしける或時王は彼の石像に向ひ此の子供を見玉はずや如何にせば爾が魂は返らんかと言ひ掛けしに石像は聲を發し若し若君(小供)の血を塗り玉はゝ生き返らんと云ふ王は丈次を生すことは山々の願なれど我子の血をぬらんとは誠に忍びざること如何やせんと迷ひ玉ひしにキット心を直し如何に我子可愛しとて丈次は我が爲めに其命を棄てたりそを知りてこれを救はざらめやと劍を拔き愛子の首を切り石像に血塗りましたに忽ち丈次は蘇生いたしました丈次は王の恩の愈深く愛子に代へて愛し玉ふ惠に感じ身が腕の血を取りて若君の首にぬりしにこれも亦元の如くに生き返りました王はこれを見て狂氣の如くに喜びまする折り姫君は會堂より歸りまして其有樣を見互に抱きあひて喜び共に永く其國に樂しく暮しましたと云ふことむかし語に見へます。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

廣告

宮内省御藏板

婦女鑑

全六冊

此書ハ宮内省ノ御藏板ニシテ婦人ノ亀鑑トナルベキ和漢洋ノ孝女烈婦貞女賢母等ノ言行事蹟ヲ蒐輯シ且ツ圖画ヲ挿入セラレシモノニテ既ニ本年一月

皇后宮ヨリ華族女學校ノ生徒ヘ御下賜相成リ實ニ婦人ノ課讀又ハ修身口授用書トシテ其德性ヲ涵養スルニ於テ最モ有益ノ書ナリ今般弊舗ニ於テ發賣ノ御許可ヲ蒙リ候ニ付婦人ハ勿論苟モ婦女教育ニ志アル諸彦ハ必讀アランヿヲ切望スル所ナリ

但シ右書ハ各賣捌ヘ差出シ有之候間何卒御手寄之書林ニテ御講求被下度候

東京書林 吉川半七恭白

定價金壹圓 郵送料金四拾錢

第九十七號に批評あり

女學雜誌は明治十八年以來引續發兌し當今既に一百號の號數に達し毎土曜日に出版して早朝より全國に配達致候事

女學雜誌は上み皇后宮陛下を始め奉り宮内省女官御中、貴顯高爵の貴婦人御中、は固より全國各地の諸女學校にして一部以上購讀せられざる所は無之其外女教師女生徒の方にハ申迄も無く凡中以上の婦人方即はち新聞に注意し世の中の進歩に心を掛けらるゝ向の女流は大抵女學雜誌を以て交際上の話しの種と致さるゝ程にて其外男子の方々にて女學に熱心の諸君及び教育に從事せらるゝ諸氏は孰も購讀有之候事

女學雜誌ハ婦女子に關する雜誌新聞中にて尤も舊るく尤も勢力あり尤も賣口多きものなる事

女學雜誌は美術を重んずるの雜誌なるに付讀者も亦た毎號之を大切に保存して十冊毎に奇麗に合本とし永久に愛讀せらるゝ者なれば之に廣告せらるゝは其日限りの新聞紙に廣告せらるゝとは相違多かるべき事

女學雜誌は普通の雜誌類と違ひ右樣特別の性質あるものあれは取分け左の如き事物の廣告を公けにせらるゝには此の雜誌に命ぜらるゝと最上の御便利なるべき事

婦女子に關する書籍出版の廣告○婦女子の好みて讀まるゝ如き書物例へば小說詩歌文章美術遊藝等に關する書籍の出版廣告○衣服、調度、髮かざり、化粧品、食物菓子の類、又は賣藥、寫眞、繪草紙等凡そ婦人方の身の廻りの品物は固より一家の經濟向に入用の品々廣告○物見、遊山、溫泉、寄席、しばい、料理屋、貸屋、賣家等凡そ婦人方の好ませらるゝ事及び其の尤も注意せらるゝ事の廣告○奉公口、召抱、うば、等の廣告

廣告

○鈴木弘恭大人著述○小中村清矩大人評

改正増補 **文法口授** 全一冊●一名和文獨案內 定價十八錢 郵稅四錢

此書は文章家なる鈴木大人が多年諸學校の生徒に和作文を授業せられしを筆記したるものにて曩に出版したる所大に諸校の賞用を得たれば尚亦今般大人に乞ひ改正增補して古人の文章數十篇を卷尾に付し或は雅文を俗文に譯し或は漢文を和文に譯したる作例をも擧げたり然れば啻和文のみならず漢文を學ぶ人の和文を漢文に譯するにも大に益あるべし且女學校などに於て和文を學ばんとする生徒諸君の爲めには此に過たる良書なかるべし

●右文法口授は學校敎科用の書籍に適當也とて發兌后一週日を經ざるに既でに成立學舍女子部跡見女學校頌榮女學校並に明治女學校長榮女塾等の敎科書となりたり

○統計局次長世良太一君序○統計協會議員吳文聰君序

婚姻論 朝野新聞記者 橫山雅男君著 ○定價一冊三十五錢郵便稅十四錢

右は橫山君が得意の統計學上より婚姻の定議其外早婚晩婚雜婚離婚などすべて婚姻に關係する事物は擧げて殘す所なく議論の確實なる擧例の精密なる世の父母たるものも亦た靑年の男女の方々必讀の書なり

○田口卯吉君結髮沿革附錄○和崎義路君校○幾本善治君跋
○渡邊鼎君著

束髮案內 美製小本八十頁細圖入 定價十五錢郵稅四錢也

當今束髮流行の折柄其結び方不案內の婦人少からず此書は日本婦人に適する束髮二十餘種の結び方を丁寧に敎へ一々細圖を附して親切に案內すれば何如なる僻遠の地に在りて束髮の風を知らざる人々も之に依て容易に自ら試るを得べし特に田口卯吉君の論文束髮會の規則其外をも添へたれば結髮改良に志ある人々は宜く一讀あるべし

東京新橋日吉町八番地 **女學雜誌社**

●**心の寫眞** 一名嗜好及性質之記錄(全一冊價金廿五錢 郵稅金八錢)

令孃愛姊諸君よ諸君が其朋友の寫眞を收めをき賜ふ事誠によしされ共こは唯其外貌を見るのみにして嗜好及性質等は之を知る事を得ず然るに此書は嗜好及性質に關係ある事柄の問題卅一個を撰み各朋友に其答案の記入を請ふものなり故に朋友の心中より出る反射は則ち寫眞となりて見る事を得べし又其側には通常形躰の寫眞を貼るべき欄をも設けたり此書は殊に年若きものに向て興味あるものなれば多くの友達を持ち賜ふ貴女諸君は早く一本を購求して朋友諸君の心意形躰兩種の寫眞を收めたまへ

發賣書林 靜岡縣靜岡吳服町三丁目 擁萬堂 **三浦定吉**
同 東京々橋區日吉町八番地 **女學雜誌社**

勝安房君題字
津田仙君著

酒の害 全

一冊定價 郵稅共金拾錢

●四冊以下一冊に付仝前●五冊以上十冊以下一冊に付割引價五錢(但遞送料は別に申受く)●百冊以下一冊に付割引價四錢(仝前)●百冊以上一冊に付割引三錢(仝前)

右第一版千五百部は一週間內に賣盡し候に付第二版出來候間續々御注文被下度候

出版 東京 婦人矯風會
東京麻布本村町 學農社雜誌局
賣捌 仝京橋區日吉町 警醒社
仝 女學雜誌社

遞信省認可

定期試驗相濟候に付欠員有之の級に限り新入生徒入校を許す

東京飯田町三丁目卅二番地　明治女學校

時間なき婦人方に告ぐ（委細規則書にあり略す）
本校は洋服裁縫脩身科英語風琴等を速成敎授す半年一年一年半の卒業とす束脩一圓半月謝一圓ゟ一圓半寄宿通學を許す五月一日ゟ始む有志の婦人速ゟ申込あれ
敎師●米國婦人二名助敎婦人七名
麴町區飯田町五丁目卅番地（飯田橋内皇典講究所横）

私立　脩身職業英和女學校

女生徒（二十名）（無月謝）募集廣告

當校ハ今回校則ヲ改良シ玆ニ敎授ノ區域ヲ廣メ内外貴婦人數名ヲ召聘シ英學、簿記、數學、編物、裁縫、押畫「ハンカチーフ」麥藁細工等ヲ始メ婦人必要ノ文學ト職業トヲ懇篤ニ敎授ス但シ出稽古通信敎授モナスヘシ東脩貳圓入校式拾名ヲ限リ無月謝ナリ有志貴婦人淑女寄宿通學トモ至急申込アレ

東京下谷區西町四番地　私立　台東學校

櫻草數種縱覽

大方の諸君御遊覽を希ふ　四月二十日より花盛り

上駒込染井　常春園　伊藤重兵衛

發兌					
四月。	七日	十四日	廿一日	廿八日	
五月。	五日	十二日	十九日	廿六日	
六月。	二日	九日	十六日	廿三日	三十日
七月。	七日	十四日	廿一日	廿八日	

定價

一册。五錢　郵税。一錢（但府内無郵税）
十册。四十八錢郵税。十錢（同前）
半年分　一圓十七錢　府外は　一圓四十三錢
一年分　二圓卅四錢　府外は　二圓八十六錢

廣告

特別廣告は婦女に關する協會會合等の記錄を揭ぐるものにて一切無料とす但し紙面半頁以上半頁分毎に右雜誌十部の注文を要し以上半頁分毎に十部增の割合と定む

一行　一回　（廿七字詰）　前金拾錢
同　三回以上　一割引
同　六回以上　二割引
十行以上一割引。二十行以上二割引。四十行以上三割引。但し不道德なる事物の廣告は謝絕す有益なる事物の廣告は社議の上無代價にて引受く女學關係の書籍は一部の寄送を乞ひ相當の廣告をなし且つ本誌に批許すべし

女學雜誌賣捌所

東京神田區淡路町暇々堂○同芝西久保櫻川町萬春堂○同神田區雉子町團々社支店○同神田區佐柄木町東海堂○同日本橋區新葭町良明堂○同京橋區木挽町壹丁目萬字堂○同本郷區元富士町盛春堂○同本郷區春木町二丁目解明堂○同本郷四丁目文壽堂○横濱住吉町角田早貞○同太田町三丁目萬字堂○同日月堂○同本町六丁目日の出屋○京都四條通小橋西へ入淨集光堂○同三條通東洞院西へ入クリスチアンボード○大坂備後町四丁目岡島支店○仙臺國分町十五番地伊勢安雜誌部○宮城縣仙臺大町木村文助○尾張國名古屋本町石版社○出雲國松江新町盛進堂○廣島縣大手町一丁目早速社○長崎酒屋町虎與號○江州彦根西内大工町新々堂○相州小田原綠町石壽堂○上州高崎田町煥乎堂○土佐國高知本町三丁目樂園堂○熊本文明堂

明治二十一年四月廿六日印刷
明治二十一年四月廿八日出版

東京京橋區日吉町八番地
發行所　女學雜誌社

東京京橋區日吉町八番地寄留
編輯兼發行人　巖本善治

東京下谷區仲徒町三丁目七十一番地
印刷　森田豐

WOMAN'S MAGAZINE.

"JOGAKU ZASSHI."

Price 5 *sen*. By post *yen* 1.43 six months, *yen* 2.86 per annum, in advance.
Edited and published by Y. H. Iwamoto, at The Jogaku Zasshi Office, No. 8B HIYOSHICHŌ, SHINBASHI, Tôkyô, Japan.

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY